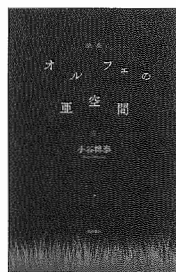


小谷博泰歌集
『オルフェの壱空間』



令和3年7月20日
飯塚書店 1980円 (10%税込)

「白珠」に所属し、国文学の研究者でもあった著者の第十五歌集。近年は毎年一冊に近いペースで歌集を出して、本歌集のあとがきで著者自身も「多すぎると思いながら」と記している。さらに、あとがきには歌集本体に入れられなかった俳句十六句も収録されており、旺盛な創作意欲がうかがわれる。

ラベンダーの花ゆれておりベンチからしばらく風のかたち見て
いる
海を見れば引き込まれそうく
レーンのかなたに夏の雲湧いて
おり

一首目、ラベンダーの花は案外し

つかりとした茎であるが、風に吹かれてさまざまな形に揺れるのを作者は楽しんでる。二首目、目の下すぐのところは海があるのだろうか、視界にはクレーンも入っていて、日常の風景であることに安堵感を覚える歌。何か強い感動を伝えようという歌ではないが、心地よく読める。

何年か何十年かの後に来てわれ
のまほろしまた海を見よ

令和二年の十月の今日ほくがこ
こに居たことなどは忘れるだろ
う

一首目、自身がこの世を去った遠い先の世でもこの海を見ている者がいるはずだろう、それは今の私にとっても近い存在なのではないか……そんなことをふと想像してみたのだろうか。二首目、「ここ（雨の日のバラ園）」が特別な場所であったとしても記憶はやがて消えてしまうのだろうか、短歌作品として、言葉として残る。このことが歌を詠む動機の一

ひとつであり、喜びでもあろう。あまり感傷的にならず、「居たことなどは」とやや突き放した表現に抑えているのは作者の照れであろうか。

糸トンボが睡蓮の葉にとまりたり止まりたるまま見えなくなりぬ

地藏堂のロウソク短くなつており旧街道に雨の止みたる

作品の表記は新仮名遣いで、漢字や片仮名の選択に関してもそのことをかなり意識している。一首目の「トンボ」や二首目の「ロウソク」は「蜻蛉」や「蠟燭」ではそれらが視覚的に強く印象されすぎて自身の作品として成り立たないのだろうか。ほぼ一年間の作品六三三首が収録

され、何気なく口をつけて出てきた言葉が短歌になったかのような歌集だが、口語体のリズムや軽快な視覚的効果を充分活用した一冊になっている。

〈大谷雅彦・評〉